

家庭小説

梅屋敷

堀内新泉

一、  
 人は怠けて居つても、月日は急げぬ。一年といへば、その間に春あり夏あり秋あり冬あり、随分長い間のようなだが、さてその間に、自分は何を爲すかを思へば、たい最ふ月日の疾さの驚かるゝばかり、年の元日から元日までの間は唯た一足、油断も隙もあつたものでない。

人の一生も亦この通りで、餘程、時間を無駄にせぬようにして働かぬと、何程の仕事も出来ぬであらう、つい近い頃のお正月まで、紙鳶を揚げたり、羽根を突いたりして、愉快に遊んで居つた少年少女が、今は早モウ我れ自ら、少年少女の父母になる、何人も月日の足の疾いのに、悔りせずには居られまい。

とは云ふものゝ、幾つになつても、悪くないも

のは、親の情とお正月！  
 恐れ多い事ながら、上は九重の雲深きあたりより、下は乞食が小屋の裏まで、新年の瑞祥に満ちた今年の元日も、聖人の心のように静に暮れて、一面瑠璃を張つたような空に、風は強いが紙鳶の唸りもハタと止み、今少し前までは、到る所に、カチカチと聞えて居た、羽根突く音も納まつた。夜は遊戯の局面を一轉して、最早程なく骨牌の戦ひに進めるのであらう。

二、

誰も、罪なき少年少女に對して、趣味と同情とを持たぬ人はあるまい。

と云ふ中には、花園夫人は、世の少年少女に對して、殊に深厚なる同情を有つて居られるが、その中にも亦、殊に少女、その中にも、また取分け、貧しい家の少女等に對し、殆んど我が子同様の、深い同情を有つて居られる。

これには聊か仔細のあること！我が子の可愛さを知らぬ人に子をやるな、丈夫な齒を有つて居る人に、齒の痛さを語るなといふのは實にこゝであ

る。

三、

花園夫人は例年の通り、今年も元日の夜の午後六時を期して、我が近傍に住む、貧家の少女二十余名を集め、晚餐を饗應して、兼一年中その爲に貯蓄して置いた或る金額を、新年の小使として、一座の少女等に分けて遣り、其處にも彼處にも小さい笑顔の輝くのを見て、夫人は心に、人間の最も高尚な喜びを受取つた。

さて、これから、自分も讀方の役を勤めて、一同に骨牌を取らせ、その上にも尙、喜びと満足とを與へよう思ひながら、夫人は床の置時計を見て「ア、丁度、今頃の時刻であつた！」

と感に入り、何を思ひ出されたのが、その涼しい両眼に、涙の光つたのを、一座の少女達は見て、夫もはず誰もしんとした！

夫人は靜に涙を拭いて、慈愛溢る、兩眼に一座を視られ、まだ幼い女子達のために例年の通り骨牌の催はしに先たつて、一場の修身談を始められた。

四、

「皆さん、今夜も亦私が、例年の通り、短い一つのお話を致しますから、何うか善く皆さんに、長く覚えて居て頂きたいものでございます！」「一座の少女は、兩手を膝に敬意を表した。夫人は言葉遣いと云ひ、はた萬事の舉動と云ひ、蓮華草咲く春の日よりも和かに、

世の中の生活向の、忙はしく成つてまゐるに付れまして、この節で大分、男女共に、獨立自活といふ言葉が流行つてまゐりました。たい言語の上ばかりでなく、事實の上に左様成つて参りました。成程、昔と異ひ今日では、恃ひは唯モウ我ればかり、他は的にはなりませぬ。他の力を當にして、安全な生活をしようと思ひますと、それは實に飛んだ事になつてまゐります。

併し、又、一方から申して見ますと、何んな勝ひか方でも、たい我れ一人の力では、恐らく何事も出来ぬと、申して可いかも知れませぬ。云ひ換へて見ますれば、人は人の愛を失つて仕舞つては手足を振がれた蟹のようなものであります。而て

見れば、人は一人でも多くの人から、少しでも多く、愛を我が身に引くようになければ、その人は決して幸福な人とは申されません。

殊に、女子は、愛を以て世に立つものでありますから、此方からは、少しでも多くの愛を他に及ぼし、また此方には、少しでも多くの愛を、他から受けるようになければ、決して幸福な生活は出来ません。

こゝを思はずに、人はたいお金持にさへなればそれが一番幸福なものだと思ふと、實に飛んだ間違を生じます。

それなら、何うすれば、我が愛を他に及ぼし、また他の愛を我が身に引くことが出来るかと申しますれば、先づ我が心を優しく持つのが肝心であります。或る名高い學者の語ばに、「世の中は恰是鏡を見たようなもので、此方の心が邪見であれば、世の人も亦邪見に見え、此方の心が親切であれば、世の人も亦おのづから親切に見える」と云ふ事があります。我が善ければ人も善く、我が行ひが悪ければ、

人も亦おのづと我が身に悪しくなるのであります。

愛とお金の多少とは、全く別物でありまして、お金が澤山あるから人の愛を受け、またお金がないから人の愛は受けられぬといふ譯のものではありません。

云ひかへて見ますれば、愛は心次第のもので、決して金次第のものではありません。何よりの證據には、お金はあつても人から憎まれ、またその日は貧しく生活して居つても、人に愛せられて居る人は幾人もあります。

何んな強い人でも、人の愛に背いては、即ち味方を失つては、何事をしても、決してうまくは参りませんが、よしやその日は貧しく生活して居つても、人の愛にさへ富んで居れば、即ち味方さへ大勢有つて居れば、人は何んな事でも出来ます。して見れば、人はたとひお金は失つても、愛は失はないように心がけねばなりません。たい、言語の上ばかりで、斯う申しあげまして、皆さんには、まだお分りにならないかも知れま

せんから、或る實話を例に引いて、皆さんに善くお分りになるように、最一度お話を致しましよ。今私共の住つて居るこの邸の前に、昔——と云つても二十年ばかり前のことですが——梅屋敷梅屋敷と人の呼ぶ、立派な屋敷がありました、いづれも見事な梅の古木が、澤山植はつて居りましたので、春、鶯の鳴く頃は、實に何んとも申されぬ趣致がありました。

梅屋敷の持主は、數代榮えた富豪でありました。大木も壽命が盡されれば、おのづから枯れるように、この家にも色々な不仕合が引きついで、或る年の極月に、とうとう破産しなければならぬ事になりました。

世には色々哀な事があります、これまで豊に育つて来た人々の、暴に、その日の事に困るようになつたのも、確に哀の一であります。

梅屋敷でも、俄にこれまでの、富にも信用にも離れて、一家の人人が、急に自ら食を求めぬば成らぬ事に成りましたが、これまで豊に育つて来た人々のこと、お金は何うして儲けるものやら、誰

も心得て居りませぬので、皆、當惑致しました。

所が、はや、その年の極月二十幾日といふ日に成り、今日を限り、多年住み馴れた梅屋敷を立退かなければ成らぬといふことになりましたので、一家は誰も目に涙、皆ごん察し下さいまし。その頃、梅屋敷には、十五になる男の兒を頭に、次が十三の、これも男の兒、後は十歳を長にして、三人の少女がありました。

いよいよ一家破滅といふ日に成つて、二人の男の兒は、相分れて丁稚奉公に行き、十歳の娘は叔母さんの家に引取られ、一番末の四ツになるのは兩親に連れられて、遠方に行くことに成りました。悲しい中の悲しいくじに當つたのは、七ツになる霞江といふ、末から二番目の娘で、こればかりは行所に困りました。

五、

ところが、長年、出入をした者の中に、藤作といふ、實意ある植木屋がありました、これがその兒を引受つて養ひ、育てることに成りました。

霞江は、俄に、親にも兄弟にも別れまして、藤

作の家に行つて見ますと、萬事が、これまでの我が家と様子が違ふばかりでなく、内儀さんといふのが、實に、邪見な女で、少し氣に入らぬことがあれば、餓鬼だの、畜生だの、厄介者だのと云つて、太く葭江を苦めるのです。

けれども、この兒は極、心のやさしい子でありますので、及ぶ丈柔順に、藤作夫婦につかへて居りました。が、小供心にも、親、兄弟の事を思ひ出しては、日には幾度か兩手を顔に當てました。

六、

年は間もなく明けまして、お正月の元日に成りました。が、可愛や葭江は去年と違ひ、羽根一ツすら買つて貰ふことは出来ません。

人は喜び祝う元日を、葭江は藤作の家で、ひとり淋しく送りましたが、日の暮方に成ると、俄に去年の事を思ひ出し、「今、お家に歸つて見たら、若しや、お父さまや、母さまや、兄さま達や、姉さまや、妹の喜代ちゃんやまで、歸つては居られまいか」と、小供心に思ひ浮べ、矢も楯も堪らずに、以前のお家の梅屋敷に飛んで歸つて見ますと

いふと、お家は早此度の持主に住はれて、御門が締つて居りました。

少女はワツと泣出して、御門の前に暫く立つて居りますと、兼てこの兒が優しくしてやつておいた、梅といふ、以前我が家に使つて居つた、一人の女中が通りかゝり、

「オヤ、おなたは！」

と云つた儘、葭江を抱き縮めて泣きました。が、「何うして今頃、遠い所を此處まで来たかといふことを聞いては、梅は尚々泣きまして、

「まあ、此方へ入らいいしやい！」

と云つて、二人一處に泣きながら、手を引いて來たは、この、花園の家でして、梅は葭江の家から暇の出た後は、この花園家に雇はれたのでありました。それは丁度、今から二十年前の、今夜の今頃でしたらう」

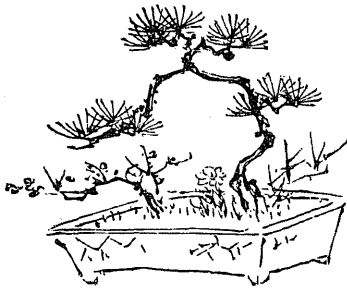
と云つて、夫人は再び涙を流した。

一座の少女は、皆、涙ぐんで、夫人の話を聞いて居つたが、

「奥さま、それから、その葭江さまといふお娘は、

何らお成りでしたか？」  
 と問ふ。夫人は涙を拭いて、  
 「それから、この花園家の娘に成つたのです！」  
 「ぢやア」、大きくお成りなすつてから、此方さ  
 まから何方へか、おかた付き成すつたのですか」  
 と一座の少女は一齊に問ふた。  
 「いゝ、え！その子は、今、花園家の夫人に成つ  
 て、今夜斯うして皆さんと、お話しして居ります」  
 「ぢやア、奥さまのお小さい時の事ですな！」  
 と、一座の少女は、尙々敬慕の情を以て齊しく膝  
 を前めるのであつた。

(完)



雑 録

●女子高等師範學校彙報

△修學旅行 四年生は去月初旬三部に分れて文科は神奈川縣に  
 理科は千葉縣に技藝科は埼玉縣に夫れ々々修學旅行を了へた  
 りと云ふ。

△英語科生徒募集 同校内の第六臨時教員養成所にては英語科  
 生徒に缺員あり目下臨時募集中なり詳細は去月七八兩日の官  
 報にあり。

△保方實習科 豫て實習中なりし同科生徒の中四名は地方より  
 の要求に依り舊職業を了へて夫れ々々各地方に赴任せりと云  
 ふ。

●井上通女遺徳表彰會 學和漢を兼ねて詩歌の  
 技に勝れ且婦徳盛なりし井上通女は讃岐丸龜の生  
 れなりとの事にて當市の有志者は本年の百二十年  
 忌を幸ひ其遺徳を表彰して女子教育の奨励に資せ  
 んとの計畫あり舊臘十八日其委員會を丸龜小學校  
 内に開きしに中學校長女學校判事檢事等二十餘名  
 の來會あり直に規則を議定して役員を選挙したる  
 に會長には長谷川丸龜市長副會長に岡田高等女  
 學校長當選したりと尙同會が來年度に於て行はん